

(社)東洋音楽学会関西支部

支部だより

第1号 (1988-11-08)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

ごあいさつ

関西支部 片岡義道

このたびの第19回通常総会における役員の改選によりまして、私どもの新しい役員による関西支部の体制が充足することになりました。これを機にして従来の支部事業のなかになにができるだけ新鮮な試みを加えてみたいものと考えております。事務局から支部会員あての連絡を、この「支部だより」にておこなうことになりました。会員のみなさまの積極的なご意見をお寄せください。

定例研究会について

例会担当理事 山口修

(1) 案内

関西支部 第14回定例研究会		
とき	1988年11月26日(土) 14:00~17:00	ところ 兵庫教育大学芸術棟(地図参照)
担当	水野信男(会場)、高岡結貴(会場) 岩井正浩(司会)、山口修(企画調整)	☎ 07954-4-1101 内線 526
14:00【演奏】	ジャワのガムラン	兵庫教育大学ガムラン・アンサンブル
曲目	ガワ スボカストヴォ / アヤ・アヤアン / スレプガン / サンバツ (スルト・ロリノ) Ketawang SUBAKASTAWA / Ayak-ayakan / Srepegan / Sampak (slendro sanga)	
14:30【新・連続講座】	《楽譜の諸相》その1	高岡結貴
記録することの問題性 — 中部ジャワの gamelan を題材にして		
15:45【研究発表】	和歌山県北部のわらべうた研究	泉健

(2) 本年度の定例研究会開催予定および発表の公募

第140回	1988-09-17	大阪音楽大学	終了
第141回	1988-11-26	兵庫教育大学	上記参照
第142回	1989-02-04	大阪府立文化情報センター(中之島)	発表申込締切 1988-12-01
第143回	1989-04-22	【予定】京都市立芸術大学(西京区)	発表申込締切 1989-03-31
第144回	1989-06-03	大阪芸術大学(南河内郡)	発表申込締切 1989-03-31

上記の公募は、新しいテーマによる連続講座(次頁参照)でもフリーのテーマでも結構です。ただし、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともあります。予めご了承ください。

◆申込方法 連続講座・フリーの区別、発表の種別(研究発表、調査報告、資料紹介、研究演奏等の別)、発表題目、使用希望機器、希望日、氏名、連絡先をはがきに明記のうえ、下記宛て送付ください。

◆送り先 〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部音楽学研究室 山口修

(3) 新・連続講座「楽譜の諸相」と関連企画について

これまでの定例研究会では、「楽器の諸相」というテーマで連続講座を開いてきましたが、去る9月をもって一応の終了とします。この11月からは、新しく「楽譜の諸相」というテーマを掲げることになりました。ゆるやかな枠組みのテーマを設定したのは、研究発表ほどには緊張しないでどなたにも参加願えるようにとの配慮からです。しかし、現実には定例研究会は京阪神に偏ってしまいます。そこで、この企画に関連するものとして、今回から「支部だより」に「連載エッセイ」コーナーを設けて投稿により類似の気楽な発表の場がもてるように考えてみました。

連続講座の方では、たとえば次のような主題領域が対象として考えられます。

- | | |
|---------------------------------|------------------|
| ①音楽の過去の姿を現在に伝える古譜 | ②伝承に供されてきた記譜法 |
| ③理論的思考を反映させた楽譜（たとえば、分析を目的とする採譜） | |
| ④秘伝から出版までの楽譜の意義 | ⑤異文化の記譜法の導入 |
| ⑥文化接触による記譜法の変化 | ⑦楽器の特性を反映する楽譜 |
| ⑧音楽的時間の垂直的／水平的認識（縦書き／横書き） | |
| ⑨身体構造を反映する楽譜（たとえば、タブラチュア） | |
| ⑩唱歌（しょうが）がもつ楽譜的機能 | ⑪楽譜のない文化 |
| ⑫聴覚／視覚の交差 | ⑬触覚／聴覚の交差（点字譜など） |
| ⑭モノクロとカラー | ⑮拍節の表示 |
| ⑯形式区分の表示 | ⑰音高・旋律型8の表示 |

連載エッセイの方では、次のようなことが扱えるでしょう。

- (A)楽譜にあらわれる「ことば」 (B)楽譜に供される記号
(C)音楽の特徴を端的に表明して楽譜的な意味合いを担う用語

今回は、総論的な内容のものを(0)として、そして(A)と(B)に関わるひとつの事例を(1)として掲載しました。とくに(1)の方は、次号から自由に投稿していただくためのモデルとしての意味合いも含まれています。どしどし投稿してください。字数は600字程度が最適ですが、多少の増減は構いません。

社団法人東洋音楽学会関西支部1988年度役員名簿		1988年11月現在
理事	片岡義道（支部長）、月溪恒子（総務）、山口修（経理・例会）、藤井知昭（編集）	
参与	酒井諒、谷村晃、角田一郎、仲芳樹、難波正、牧野英三、馬淵卯三郎、横山正、吉永孝雄	
参事	尾野麻子（総務・経理）、志村哲（総務）、大東純子（総務）、長方正博（編集・例会）、広井栄子（編集・例会）、大塚洋子（例会）、高岡結貴（例会）、南谷美保（例会）、山田智恵子（例会）、由比邦子（例会）、渡辺浩子（例会）	
地区委員	名古屋地区 大西友信、久野寿彦、高村正一、安田文吉 京阪神地区 泉健、井野辺潔、岩井正浩、岩田宗一、小野功龍、久保田敏子、小林幸男、桜井哲男、渡田篤子、志村哲男、瀬田徹、中川真、中小路發逸、西岡信雄、梁島章子	
	中国地区 中山明慶、岡田千里、片桐功、原田宏司、山田陽一	
	九州地区 松原武夫、松永健	
	沖縄地区 高江洲義寛	
臨時職員	幸野智子	

(0) 「音楽を記すこと」と「音楽について語ること」

山口修

音楽は、はかない存在である。空気が存在するところでしか成立し得ないし、その空気振動のひとつの結果としての「音」という現象に依存しているからである。ひとつの音は、確かな立ち上がりと何らかの持続と、そして、いつのまにか減衰して結局は消えていく。沈黙。それもまた、音楽にとってかけがえのない現象である。しかしそれもまた、はかない。なぜなら、しじまは「音」によって消去される運命にあるからである。

こうして音楽は、たがいに否定し合う「音」そして「静寂」を組織的に利用することによって成立する。その場合、音には一定の高さ・色あい・長さ・強さが恣意的に与えられる。単なる音響現象、単なる静寂現象であることを超越して、いわば「文化」として音楽が現前する所以である。

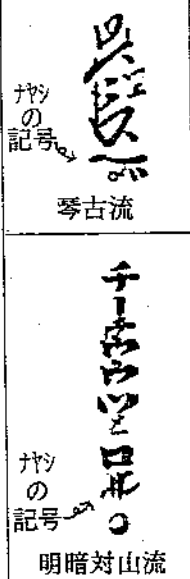
はかない存在の音楽を、人間は固定することを試みる。別の実体へと変換するのがその手段である。たとえば「ことば」に置き換える。その「ことば」を耳にすれば、あるいは書かれた文字を目にすれば、その出発点であった、あるいは到着点であるはずの「音」を人は思い浮かべることができる。一定の感性・知性そして理性を備えていさえすれば。いわゆる音楽用語の類は、そのような機能を帯びさせられている。

音ないし音楽の意味の一端をいわばメタファー（隠喩）として包み込む「ことば」は、それ自体ひとつの「しるし」である。サイン、シンボル、アイコン……。そして、文字として記されるか否かの如何にかかわらず、音楽を規制する働きをも「ことば」ないし「しるし」は全うしなければならない。

「しるし」は、「ことば」よりも明瞭なかたちで記号化される。楽譜に書き込まれた様々な記号、そしてそれらをシステムとして平面上に配列すること自体が記号であるともいえるだろう。さらに、音楽から楽譜へ、ないし楽譜から音楽へと変換される過程の中間に位置するものとして、擬音・擬態などの知覚・思惟作用を駆使したいわゆる唱歌（しょうが）の世界が具現化されるのである。

(1) ナヤシ

瀬山徹



尺八の技法は多彩である。簡素な竹の管から次々と繰り出される微細な音の変幻自在に、私たちは魅せられてしまう。ところが、そうした装飾的な演奏技法を用語に即して整理してみようとする、思わぬ困難にでくわすことがある。ナヤシもその一つ。

歌口に息を吹き込みながら、指は使わず、あごを引いた状態からあごを上げていく。音高は、ずり上がるように連続して変化していく。めざす音高をからめ取るような動作とともに、当該音へと安定する。メリとカリの技法の組み合わせ。しかしこれだけの技法でも、流派によって微妙に異なる。簡単に定義し、整理してしまうわけにはいかない。

ナヤシの用語は、主として琴古流で使われる。ただし、類似の技法は他の流派にもあって、呼称がないにすぎないこともある。たとえば明暗対山流のように、「ん」の譜字をあてていたり様々である。さらに、「息ナヤシ」のような用語もあって、にわかには分類しがたく、生み出される音と似てなかなか微妙である。それゆえに、尺八の性質を最もよく表現することばであるのかもしれない。

ナヤシの語源は「萎す」であるとする説が一般的だ。なえるように、やわらかくすることと、定まらず漂う音高との連想からか。ただし、萎すには、鉄などをきたえて強くするとの意味もある。

